

# 趙氏孤兒劇小論

## —元雜劇に於ける「悲劇」の一断面—

赤 松 紀 彦

### 一、

山西省中南部の、臨汾つまりかつての平陽を中心とした一帯は、金から元にかけての舞台の遺構や墓から出土した碑雕など、当時の演劇の上演形態を知る上で貴重な文物資料が近三十年來続々と発見された地域であり、<sup>(1)</sup> また明清二代にわたっても演劇のとりわけ盛んな地域であった。<sup>(2)</sup>

元の大都の人で、元雜劇の早期の作者紀君祥<sup>(3)</sup>の作とされる「趙氏孤兒」劇は、遠く春秋時代にこの地域で起った趙氏一族の皆殺しとその復讐の物語を題材とする、元雜劇の中でもとりわけ優れたものと評価される作品であり、はやくに欧州に紹介されたことでも知られている。<sup>(4)</sup>

そもその事件については、その発端である晋の靈公とその家臣趙盾との間の確執及び一族の趙穿による靈公殺害という、古くから有名な事件が、『春秋左氏伝』宣公三年（紀元前六〇六年）に記載されており、さらに、『史記』趙世家・『新序』節士篇・『說苑』復恩篇

等のなかに、そののち趙氏一族のライバルであった屠岸賈が、靈公殺害に対する責任を口実に、趙盾の子趙朔をはじめとして一族を皆殺しにしたこと、朔の遺腹子が唯だ一人生き残った経緯、そして十五年のちにその孤兒趙武が、景公の助力のもとに屠岸賈一族を滅して復讐を遂げたという、既に一篇の物語と名付け得るほどにふくみを備えた詳しい記述を見ることができる。<sup>(5)</sup>

さて、この事件は、宋代に至ってその宗室の姓が「趙」であることを理由に、程嬰・公孫杵臼・韓厥という、孤兒を救い趙氏の断絶を防いだ三人の人物が忠臣義士として顕彰され、にわかに注目されることとなった。『宋史』姦臣伝中の呉処厚の伝に次のようにいう。

「仁宗屢<sup>しばしば</sup>ば皇嗣を喪うに、処厚上言すらく、臣嘗て史記を読み、趙氏の廢興の本末を考うるに、屠岸賈の難に当りて、程嬰・公孫杵臼死を尽くし以て趙孤を全うす、宋天下を有<sup>も</sup>つに、二人の忠義未だ褒表されず、宜しく其の墓域を訪ね、建てて其の祠を為るべしと。帝其の疏を覽て鑒然<sup>かみぜん</sup>たり、即ち処厚を以て將作丞と為し、訪ねて両墓を絳に得、侯に封じて廟を立たしむ」<sup>(6)</sup>

この呉処厚という人物は、姦臣伝に列せられている通り、あまり

評判の良い人物ではなく、また、洪邁『容齋隨筆』巻十では、

「古えの先聖帝、明王の墓すら、尚お考う可からず。区区たる二士に、豈に復た兆域の在る所有らんや。絳郡朝命の訪う所を以て、姑らく他の丘壟を指して之が詞を為し、以て責を塞ぐのみ」

古えの聖王ですらその墓の所在が解らなくなっているのに、この二人の墓など、地元の人々が朝廷からの使者に問われ、仕方なくいい加減にあたりの丘を指し示したにすぎない、と辛辣な批判を加えている。とは言え、この話が、宋代特に南宋になってから、金そして元の圧迫を受ける中で、「趙氏」を救った話としてもはやされたであろうことは、容易に想像できる。<sup>7)</sup>

さらに、本稿でとりあげる元雜劇「趙氏孤兒」劇よりも、時代はやや降ると考えられるが、元末明初、元雜劇と入れ替るように復興しつつあった南方系の演劇「南戲」の、その復興期の作品とされる「趙氏孤兒記」が現存し、冒頭の場面の前口上に、

今日敷演、誰家故事、那本傳奇、乃演趙氏孤兒冤報冤、這一本戲文、誰人不曉、那個不會、

（今日演じますのは、誰の故事、どの伝奇かと申しますと、これすなわち「趙氏の孤兒冤みもて冤みに報ず」を演じます。この戲文、知らぬ人はおりすまい、わからぬ方はありますまい）とあるのは、これが演劇或いは語り物といった作品の中で、しばしば取りあげられてきたことを、何よりも示す材料であろう。因みに、さらにのち、この物語は明の徐元により「八義記」として長編の伝奇に編まれ、さらには現代の京劇をはじめ川劇・秦腔などの地方劇の中でも、しばしば演じられる題材となっている。

## 二、

「趙氏孤兒」劇のテキストとして、我々が見得るものには二系統ある。その一つは、科白の部分の殆んど省略された、観劇の為のテキストと考えられている「元刊雜劇三十種」本（以下通例に従い元刊本と称する）と、いま一つは元雜劇の選本として最もよく読まれてきた、明・万暦年間刊行の臧晋叔「元曲選」本（「醉江集」本も同系）である。この二種のテキストの間に横たわる差異として、まず挙げられるのは、元刊本では第四折を以て終っているのに対し、臧本では一本四折という元雜劇の通例を破って第五折が存在することであるが、個々の曲辞について検討した場合、そもそも校勘の対象となる箇所はわずかであつてむしろ曲牌を同じくする、つまりメロディーを同じくするのみで字句を全く異にする曲の方が多い。両者の距離は、そもそも一つの作品の異本であるとするのがためらわれる程、大きいのである。両者の比較を通じてその差異の由来する所を探ることは、そもそも臧本が元刊本から直接改編されたものではなく、また臧本が基づいたテキストの形を考える上で有力な手段となる、それに先立つ明の内府本などがこの作品には存在しないという点で、必ずしも容易ではない。しかし、元雜劇を元代に演ぜられていた演劇として把えようとする場合、従来概ね臧本に基づいて「名作」という評価の与えられてきたこの作品について、改めて元刊本を視野の中心に据えて考察してみることが必要とされよう。以下、この小論では、両者の比較を通じて見出し得た元刊本「趙氏孤兒」劇の作劇上の特徴について述べてみたい。

はじめに臧本に拠つてこの作品の梗概を述べておく。

(楔子)

晋の靈公の武臣屠岸賈はそのライバル趙盾と日頃から仲が悪く、さまざまな手を使って殺害を謀るが果たせず、最後には靈公に讒言して趙盾以下一族三百人を皆殺しにする。公主の夫であるが故に手を下せなかった息子趙朔を自殺に追いこみ、また懷妊中の朔の妻、つまり公主を幽閉する。

(第一折)

公主は男児を出産、屠岸賈は生後一カ月を待ってこれを殺そうとするが、趙盾に恩を受けた医者程嬰が薬箱に隠してその趙氏孤児を救い出す。程嬰を宮門で捕えた武將韓厥も、内心では屠岸賈を憎んでおり、これを見逃して自殺する。

(第二折)

孤児が救い出されたと知った屠岸賈は、国内の半歳以下の嬰兒の皆殺しを命じる。一方程嬰は田舎に隠退していた靈公の臣下公孫杵臼の許に至り、孤児を彼に託し、程嬰自身の子を孤児と詐って訴え出るよう勧めるが、公孫杵臼は承知しない。そこで程嬰は逆に自分の子を公孫杵臼に託した上で、自ら屠岸賈に孤児を隠している者がいると訴え出ることとする。

(第三折)

程嬰は屠岸賈の許へ訴え出、彼を案内して公孫杵臼の家に出かける。屠岸賈は程嬰に命じて公孫杵臼を拷問、その目の前で孤児、実は程嬰の子を惨殺する。公孫杵臼は階基に頭をぶつけて自殺する。

(第四折)

二十年後、屠岸賈は程嬰の子程勃、実は孤児を自分の義子として

屠成と名付け、武芸を教えこむ。程嬰は二十歳となった孤児に趙盾一族の悲劇を絵巻物に描いて示し、復讐を決意させる。

(第五折)

孤児は、晋国の上卿魏絳の助力を得て屠岸賈に対する復讐を遂げる。

以上がこの作品の概要であり、既に述べたように元刊本には第五折は存在しない。おそらく第四折での孤児の決意ののち、簡単に演じられたものと考えられる。また屠岸賈が程勃、実は孤児を自分の義子として「屠成」と名付けるくだり、元刊本ではどうなっていたかは不明であるものの、南戯の「趙氏孤児記」では、屠岸賈と程嬰は義兄弟となり、孤児を「屠程」と名付ける。程勃の姓をそのまま名としたわけであるが、いかにも俗な作品であることを窺わせるものであり、あるいは元刊本も「屠程」であったのかも知れない。

さて、この物語の中心となる事件が、史実として『左伝』・『史記』等に見えることは上文に触れた通りである。もとよりこうした演劇作品がその忠実な劇化であろうはずはなく、そこにフィクションとしての膨らみを伴うのは当然であり、その差違をいちいち指摘することがさ程意味を持つものでないことは言うまでもない。しかし、『左伝』・『史記』等の記載では、そもその事件の発端が、靈公との不和から趙盾が亡命しようとした矢先に、靈公を從兄の子趙穿が殺したことにあった点、韓厥は自殺するのではなく、のちに屠岸賈の誅殺を景公に進言するのが彼である点、また程嬰は孤児とともに山中に隠れたことになっている点の三つについての差違は、実は「趙氏孤児」劇の性格を決定づける、ストーリーの展開上の大きな屈折

点となつてゐるのであり、詳しく取り上げることとしたい。

さて、既に述べたように、元刊本と臧本とは曲文の異同が甚だしく、さらに曲そのものの出入もかなりの数にのぼる。そこで二本の差異を明らかにする最初の手掛りとして、第五折を除外した上で、正末、つまり唯一の歌唱者を中心とした場面の整理と、二本の曲目対照表を掲げておく。元刊本については、科白は全く省略されてゐることから、劇の進行を細部にわたつて跡づけるのは難しい。従つて、それらは曲文の内容を臧本と比較した上で推察したものによる。

(楔子)

①屠岸賈登場し、趙氏一族殺害に至るまでの一連の事件を語る。続いて沖末趙朔が公主とともに登場、使者に自殺を命ぜられ、屠岸賈への怨みを歌いつつ自殺する。

元刊本

臧本

仙呂賞花時

同上

幺

幺篇(実際には同一)

(第一折)

②屠岸賈は一カ月を待つて公主の生んだ孤児を殺そうとする。一方公主は程嬰に孤児を託して自殺。正末韓厥登場し、屠岸賈をそしめる歌を歌う。

仙呂點絳脣

同上

混江龍

同上

油葫蘆

同上

天下樂

同上

那吒令

——(この曲のないことを示す。以下同)

鵲踏枝<sup>9)</sup>

寄生草

③孤児を薬箱の中にひそませた程嬰が、韓厥の前に引き出され、何とか助けてくれるように懇願する。

後庭花

河西後庭花(実際には同一)

金盞兒

同上

醉中天

同上

④一旦程嬰は逃れるが、再び戻つて来て、韓厥が屠岸賈に知らせて他の者に捕えさせるのではないかと疑う。(このくだりは元刊本にはないらしい。)

金盞兒

醉扶歸

青歌兒

⑤韓厥は責めを受け拷問されるよりは、と自殺する。

尾

賺煞尾(実際には同一)

(第二折)

⑥屠岸賈が嬰兒の皆殺しを命ずるくだりののち、正末公孫杵臼登場。

これも屠岸賈をそしる歌を歌う。

南呂一枝花  
同上  
梁州  
梁州第七（実際には同一）

⑦そこへ孤児を伴って程嬰登場し、孤児救出の一件を公孫杵臼に告げる。

隔尾  
同上  
賀新郎  
同上  
牧羊關  
同上

⑧杵臼との相談ののち、程嬰の子を孤児の身がわりとして杵臼に託し、程嬰が密告することとする。杵臼、死への決意を歌う。

紅芍藥  
同上  
梁州  
菩薩梁州（実際には同一）  
罵玉郎  
|  
感皇恩  
|  
楚江秋  
|  
三煞  
同上  
二煞  
同上  
尾  
煞尾（実際には同一）

（第三折）

⑨程嬰が密告するくだりののち、正末公孫杵臼登場、続いて屠岸賈、程嬰登場して杵臼を捕え、拷問する。

雙調新水令  
同上  
駐馬聽  
同上  
沉醉東風  
|  
雁兒落  
同上  
得勝令  
同上  
水仙子  
同上

⑩士卒が孤児、実は程嬰の子を捜し出して登場、屠岸賈はこれを斬殺し、杵臼は岸賈を罵りつつ自殺する。

川撥棹  
同上  
七弟兄  
同上  
梅花酒  
同上  
収江南  
同上  
尾  
鴛鴦煞（実際には同一）

（第四折）

⑪二十年後、正末程勃、実は孤児が屠岸賈の義子となって登場。

中呂粉蝶兒  
同上

醉春風

同上

⑫程嬰登場、程勃の前で涙を流し、趙盾一族殺害の一部始終を描いた絵巻物をそれとなく置いて一旦退場。

迎仙客

同上

⑬程勃はその絵巻物を見て、疑念を抱く。

紅綉鞋

同上

石榴花

同上

鬪鶻鶻

⑭程嬰登場して絵巻物に描かれたかの事件を程勃に語り、自分こそ趙氏の孤兒と聞いた程勃は、屠岸賈への復讐を誓う。

鬪鶻鶻

同上

普天樂

同上

上小樓

同上

幺

幺篇（実際には同一）

十二月

同上

堯民歌

同上

耍孩兒

同上

三煞

同上（但し二煞とする）

二煞

同上（但し一煞とする）

尾

煞尾（実際には同一）

三、

以上の対照表が示す通り、二本の間の曲そのものの出入はかなりの数にのぼるのであって、元刊本のみにある曲が十曲、一方臧本のみにある曲が五曲存在する。（なお、第四折「鬪鶻鶻」は、設定が異なるらしい。）さらに曲牌を同じくするのみにすぎず、その字句はと言えば、全部もしくは大半異なる曲がかなりの部分を占めている。

以下まずはそうした例として、孤兒が屠岸賈への復讐の念を歌う、劇が大詰を迎えた第四折「上小樓幺篇」の全文を見てみよう。元刊本では次のようにいう。

既那厮背着、一人、便合交滅了九族、剗地將天下軍儲、滿國黎庶、交那厮區處、元來你做主、你佑護、交他將諸侯欺負、元來你交他、弑君殺父、

（あやつ屠岸賈は天子に背いたからには、その九族を滅ぼさせねばならぬのに、なぜに天下の軍備、国中の人民をば、やつにきりもりさせたのか。なんとおまえが力となり、おまえが助けて、やつに諸侯をばあなどらせた。なんとおまえがやつに君を弑し父を殺すともんでもないことをさせたのじゃ）

一方臧本はというと、

他他他把俺一姓戮、我我我也還他九族屠、那怕他牽着神樊、擁着家兵、使着權術、你只看這一個、那一個、都是爲誰而卒、豈可我做兒的倒安然如故、

（や、や、やつが我が一族を殺したのなら、わ、わ、わしもまたやつのお族を屠ってやる。やつが神犬をひきい、家兵を擁し、権術にものを言わせたとして、どうして怕れよう。見るがよい、この者、あの者、みな誰の為に死んだのかを。それなのに子たるわしだけが、安閑ともとのままにしておれようか。）

と完全に文字を異にするが、実は異なるのは表現の面のみではない。

いま我々が見得る元刊本自体が、当時の舞台で多少の潤色を伴ないつとも原作に基づいて一般に演じられたものと、特別かけ離れた特異なテキストであるという可能性をひとまず無視して、（原作品）

—元刊本—（明内府本等明代の早い時期のテキスト）—臧本という一つの繋がりをも想定した場合に、みぎのように字句を全く異にする曲文がかなりの比重を占めるという現象を、すべて臧晋叔ひとりの改編に帰するのは不可能である。ではこのような甚しい差異は何故生じたのか。

その理由を示す一つが、みぎに掲げた元刊本の曲文の中で傍点を附した部分である。後半部の「你」は、文義からみて歌唱者である程勃すなわち趙氏孤児自らを指し、この歌は屠岸賈をそしけるとともに、彼の篡奪行為に加担した自分を自ら非難する内容を持つ。つまり、孤児がこともあろうに屠岸賈の養子になるという設定に加えて、元刊本には、臧本には見えない屠岸賈が篡奪をはかったという、『史記』等の記載を全く無視した設定がなされているのである。

こうしたことについては、既に金文京氏が、「元刊本では、正統の天子ではないもの、もしくは諸侯に過ぎぬものを、無造作に天子として扱う傾向があるのに対し、明本では、おおむねその点が払拭さ

れている」として、本劇冒頭の楔子、「仙呂賞花時」に、

晉靈公江山合是休、屠岸賈賊臣權在手、挾天子令諸侯、把俺雲陽中斬首、兀的是出氣力下場頭、<sup>100</sup>

（晉の靈公の江山もとうとうこれで終りとなるに違いない、賊臣屠岸賈が国権を手を収め、天子を挟んで諸侯に令し、わしをば刑場にて斬首に処さんとしておる。これぞちからを出してのなれの果て）

とあるのに例を求めつつ、注意されている。この事柄は、第一折で韓厥の歌う「混江龍」に、

縱得交欺凌天子、恐嚇諸侯、但違它的都誅盡、

（ほしいままに天子をあなどり、諸侯を恐れさせ、およそ自分に背くものは、すべて誅した）

といい、第二折で公孫杵臼の歌う「一枝花」に、

屈沉殺大丈夫、損壞了眞梁棟、好臣強也屠岸賈、好君弱也晉靈公、把讒佞來聽從、賊子掌軍權重、功臣難盡忠、

（大丈夫を屈伏させ、眞の棟梁を損なつた何とも強臣であることよ屠岸賈は、何とも弱君であることよ晉の靈公は。讒佞の言をば聴き入れ、賊子が軍権の要を握り、功臣は忠を尽すことができぬ）  
といい、さらにはまた、第三折の「川撥棹」に、

你當日養神樊、把忠臣良將咬、你待篡奪皇朝、所算臣僚、他把三百口全家老小、滿門都斬在市曹、把九族都滅了、

（おまえは、そのかみ神犬を養つて、忠臣良將をば咬みつかせた。おまえは皇朝を篡奪し、臣僚をなきものにしようとした。かの三百人の老小すべて、一族全体を市曹にて斬り、九族をば皆殺しに

した)

とあるように、趙氏一族の皆殺しとともに、この元刊本の本劇全体を通じてことあることに強調される事件であつて、この作品の重要なモチーフとなつてゐるのである。さらに第一折の「天下楽」には、

待把江山、它併吞、為趙盾不從斯記恨、它興心使歹心、道賢臣是反臣、朦朧向君王行胡奏准、

(江山をば併吞せんとして、趙盾が従わぬため、恨みを抱いた。

やつは悪心にも言わせんと心をおこし、賢臣を反臣だといひ、君主のもとに全くでたらめな上奏をした)

という。そもそも、趙氏一族の誅殺のきっかけとなつたのも、この屠岸賈による篡奪のたくらみが原因なのであつた。上掲の曲文、或はのちに再びとりあげる第四折の「粉蝶児」の内容から推察する限り、事件から二十年後を描いた第四折に至つて、おそらくその冒頭に屠岸賈が完全に晋国の僭主となるのに成功したという設定がなされてゐたと考えられる。一方、臧本に於いては、上述のような内容を持つ曲文については徹底して改められ、この設定が消し去られたのである。

さて、これらの歌は、屠岸賈に対する非難とともに、彼を寵用した靈公を暗君してそしめる内容を持つ。靈公は古来暗君とされてきた人物ではあるが、本来、天子の御前での上演をその目的としていた明の内府本が、そうした主君を痛烈にそしめる内容を持つのは、金文京氏の前掲の論文が指摘する通り、いかにも不都合であつたであらう。従つて臧本がその下敷きとしたであらう、明の内府本に基くテキストの段階で、既にこの作品は大幅な改作を余儀なくされてゐた

に違ひないのである。

ところで、そもその事件の発端については、『史記』等に記されるものでは、靈公の暴虐な行ないを諫めようとした趙盾が、靈公に憎まれて争いがおこり、趙盾は亡命しようとするが、国境を出ないうちに同族の趙穿が靈公を殺害、成公をたてて趙盾が国政を委ねられる、靈公殺害から八年のち景公が位につき、その頃趙盾は死に、ちやうど十年のちになつてから、「盾知らずと雖も、猶お賊首たり。臣の君を弑するを以て、子孫朝に在らば、何を以て懲辱せん、請うらくは之を誅せん」という名目のもとに趙氏一族を屠岸賈が誅殺する、という甚だ複雑な経過を辿る。ところが雜劇の方とは言えば、臧本では楔子冒頭の屠岸賈の名乗りのせりふに、

俺主靈公在位、文武千員、其信任的只有一文一武、文者是趙盾、武者即某矣、俺二人文武不和、常有傷害趙盾之心、爭奈不能入手、(我らが主君靈公は位に在つて、文武百官のうち、信任されてゐるものはただ文官一人に武官一人、文はというと趙盾、武はというとそれがしでござる。我ら二人文と武は仲が悪く、つねに趙盾を片付けてしまおうという心を抱いてはおるが、いかんせん手をつけかねておる次第)

と単なる個人的な不和からであるとし、一方元刊本では、上述のごとく、屠岸賈が国政を手中に収めようとしたことに趙盾が従おうとしなかったのが理由であると、極めて単純な形にしている。つまり、靈公と趙盾の間の確執、及び趙盾の一族による靈公の殺害という要素を全く切り捨てることにより、屠岸賈と趙盾との対立を逆臣―忠臣という、いかにもこうした俗文学らしい対比で描くべく、単純化



したのであった。

おそらくこうした組み立ては、宋代における程嬰・公孫杵臼・韓厥という三人の「義士」の顕彰ということと相俟って、この「趙氏孤児」劇より以前に、徐々に醸し出されて来たものであるに違いない。それが遂には元刊本に見られる屠岸賈の篡奪といった設定にまで至ったのである。

元刊本に於けるこうした設定は、専横をほしきままにしていた屠岸賈の手から、程嬰以下の三人が我が身を捨てて趙氏孤児を救出し、その孤児が後に復讐をとげるといふ、臧本に共通する点に加えて、他でもない孤児がその篡奪に加担し、後に孤児自身によって篡奪者が誅殺される、という二重の意味を備えている。第四折の締めくくりの曲、「煞尾」が、臧本では、

尚兀自勃騰騰怒怎消、黑沉沉怨未復、也只爲二十年的逆子妄認他人父、到今日三百口的冤魂方纔家自有主、

(なおもむらむらと湧く怒りはどうして消せよう、心の底にわだかまる怨みにまだ仕返しはしておらぬ。それも二十年間この不孝の子がやつを父と誤って認めていたがため。やつとのこと、今となって、三百人の冤魂はその力となってくれる者を得た)と歌われるのに対し、元刊本では、

欲報俺橫亡的父母恩、托賴着聖明皇帝福、若是御林軍肯把趙氏孤児護、我與亢金上君王做的主、

(横死を遂げた我が父母の恩に報いんとして、聖明なる皇帝の福を頼みとしよう。もし近衛軍がこの趙氏孤児を護ろうとしてくれるなら、私は玉座の上なる君王の為に力となろう。)

というのは、そうした二重の意味を踏まえてのことなのである。さらにこの設定はいま一つの見逃せない効果を備えている。梗概から知れるように、『史記』等の記載では程嬰は孤児とともに山中に匿れたことになっているのに対し、この作品では屠岸賈の義子となったという設定が、元刊本・臧本共通のものとして準備されているのであるが、元刊本では第一折、韓厥の最後の歌、「尾」に次のような文句がある。

眼見的畫影圖形尋覓緊、向深山曠野潛身、

(きつと影を画き形を図いてしつかと捜し求めるであらう。深山曠野に身を潜めよ)

この部分をきいて、おそらく聴衆はなる程その通りと思うに違いない。ところがそれから二十年後の第四折では、屠岸賈の義子となつてあらわれ、その冒頭で、

也不用本部下兵卒、天子有百靈咸助、待交我父親道寡稱孤、要

江山、奪社稷、似懷中取物、(「粉蝶兒」)

(我が手下の兵卒を用いずとも、天子には百靈の咸な助くる有りという。我が父親に寡人と言ひ孤と称させよう。江山を手に入れ社稷を奪うことなど、懷中より物を取り出す如くいとたやすい) 俺待反故主晉靈公、助新君屠岸賈、(「醉春風」)

(わしは故主の晉の靈公にそむき、新君屠岸賈を助けよう)

と、篡奪者の片腕となったことを意気揚々と歌いあげるのである。これはかつて筆者が取り上げた元刊本「汗衫記」劇で、張義に恩を受けてその報恩を当然期待される趙興孫が、後に盜賊となつて張義の前に出現するという設定が仕組まれていたのと同じく、観客の間

で解決に向つて盛り上がつていった期待を一気に破壊し、新たな事態に進めてゆく手法である。そのショックが大きければ大きい程、本劇について言えば、屠岸賈に対する孤兒の復讐の決意という事態の急展開が生きてくるのであり、臧本ではこうした効果が半減されていると言えよう。

#### 四、

続いて、両本の曲そのものの出入という点から考えてみたい。この点に関して最も顕著な特徴を示すのが第一折であつて、元刊本の「那吒令」、「鵲踏枝」、「寄生草」の三曲が臧本にはなく、また臧本ではそれに入れ替わるかのように「金盞兒」、「醉扶帰」、「青歌兒」の三曲が存在する。

元刊本の三曲は、まず「那吒令」では、

想趙盾濟民、曾分飯待賓、……

(想うにかの趙盾は民草を濟い、飯を分け与えて賓客のごとくにあつかひ、……)

と、彼がいかに優れた人物であつたかを歌い、続く「鵲踏枝」では、  
枉了掃烟塵、立功勲、不能够高臥麒麟、古墓荒墳、断脛分尸了  
父親、剗地狠毒心所算兒孫、

(煙塵を掃蕩し、勲功を立てたのもすべてあだ、麒麟閣に名臣として列せられることもできぬ。古び荒れ果てた墳墓にて、父親は脛を断たれ屍を分けたれ、子孫はいわれなくもひどい心に皆殺しとなった)

と歌う。つまりこれらの歌は続く第二折・第三折でも繰り返して強調

される内容を持つものであり、そのヴァリエーションはそここに見られる。このような物語の展開とは必らずしも無関係に、劇全体の中心となる事件、あるいは感情を執拗に歌うのは、おそらく元刊本全体を覆う一つの特徴であつて、それは元の散曲の套数を読んだ際に我々が強烈に受ける印象である、これでもかこれでもかという一種の饒舌さにも繋がるものであらう。

一方臧本で付加された曲はと言うと、元刊本には、曲文から推測する限りに於いて存在しないと考えられる、程嬰が韓厥に対して疑念を抱くという新たな場面を設定しつつ、

你又忠我可也又信、你若肯捨殘生我也願把這頭來刎、(「醉扶帰」)  
(おまえが忠であるというのならわしもまた信、おまえがもし取るに足らぬ命を捨てようというのなら、わしもこの頭をば刎ねようではないか)

といった、韓厥が程嬰の疑念をはらすべく、死を賭そうという決意を述べたものである。元刊本には科白が全くないのでやや不安が残るが、上述の元刊本のような一つの主題の繰り返しを嫌った結果として、臧本ないしそれに先立つ明代のテキストに於いて、新たな情況とその下での曲が付加されたものと考えられる。

ところで、この韓厥はもともとどのような人物であつたのか。彼がこの事件で果たした役割といえは、まず屠岸賈が趙氏一族を誅殺しようとしたときのこと、『史記』趙世家は次のように伝える。

韓厥曰く、靈公賊に遇いしとき、趙盾外に在り、吾が先君以て罪無しと爲し、故に誅せず。今諸君將に其の後を誅せんとするは、是れ先君の意に非ずして、今妄りに誅せんとす。妄りに誅する之

を乱と謂う。臣に大事有るに君聞かず、是れ君を無みする也と。屠岸賈聴さず、韓厥、趙朔に告げて趣やかに亡がれよと。朔肯ぜず、曰く、子必らず趙祀を絶たずんば、朔死すとも恨みずと。韓厥許諾し、疾を称して出でず。

屠岸賈に反対し、趙朔に逃亡を勧めたことと、その十五年後に、

景公疾めり、之をトウに、大業の後遂げざる者崇りを為すと。

景公、韓厥に問うに、厥、趙孤の在るを知り、乃ち曰く、大業の後晋に在りて祀を絶たれし者は、其れ趙氏なるか。……

と、趙氏孤児の存在を景公に告げ、その復讐への糸口を作ったことであつた。つまり、言ってみればこの事件の中での脇役にすぎなかつたのであり、それ故、宋代にまずはじめは程嬰と公孫杵臼が侯に封じられて祀られ、やや後れてそこに加えられることとなつたのである。

ところが、本劇に於いて彼に与えられた性格は大いに變化した。劇のはじまりの部分で、程嬰が果たして孤児を携えて脱出できるか否かの鍵を握る人物となっており、この第一折の終わりで自殺、この作品の悲劇的要素を形成する上で、欠くことのできない役割を賦与されたのである。

かつて王国維は、この作品に対して閔漢卿の作とされる「寶娥冤」劇とともに、

世界の大悲劇の中に列べようとも、遜色の無いものである。<sup>00</sup>

という評価を与えた。けれども、実は西洋古典劇における「悲劇」のかたち、見終つたあとの観客をしばし放心状態に追い込むような

全く救いのない主人公の悲惨な最期といったものを、元雜劇をはじめとする中国の古典劇の中に見つけ出すことは出来ない。それは、どれほど悲劇的な要素を孕んでいようとも、必らずめでたしめでたしという大団円を以て幕が閉じられるのを通例とするのであり、劇中の葛藤がどれ程複雑なものであろうとも、例えば元雜劇では第四折において、或るものはあたかも終りを急ぐかのような展開を見せて解決に進んでゆく。臧晋叔自らが『元曲選』の序に、「或いは謂う」とした上で、

故に一時の名士、馬致遠・喬孟符の輩と雖も、第四折に至りては往往彊弩の末たり矣。

というのは、こうした前提が、しばしば第四折が波乱を欠き緊張を失つた、事件の解決のみに宛てられた部分となるといふ結果を生じ勝ちであることを指してのものであつた。

しかし、本劇に関して、実際の舞台上での上演ということと合わせて考えてみると、むしろ幾度となく繰り返し歌われてきた感情が、第四折に至って一挙に解き放たれるところにこそ、聴衆を引きつけるおもしろさがあつたのではないか。屠岸賈の片腕となつてその篡奪にまで手を借そうとした趙氏孤児が、その復讐を決意した時点で、つぎつぎと命を絶つていった趙朔・韓厥・公孫杵臼によつて歌い継がれ、聴衆の胸に刻まれた感情が、ようやく一挙に解消される。こうした執拗なまでの一つの感情の積み重ねという点については、元雜劇の形式面での大きな特徴である一人独唱、つまり歌唱を担当する俳優は原則としては一人のみで、それが一つの折の内では同一の人物に扮する、つまり第一折で韓厥に扮して最後には斃れた俳優が、

第二折に至るや今度は公孫杵臼に扮し、再び屠岸賈への怨みを歌うという形をとることが、それを聴く側にとってはさらにその効果を大きなものとしているのである。

ところで、王国維が本劇とともに名だたる「悲劇」として推した「竇娥冤」劇や、同じく関漢卿の元刊本「西蜀夢」等の、元雜劇のなかで古い層に属する作品にみえる「悲劇」的な色彩のうちに、廟に於ける鎮魂祭祀に演じられた演劇という要素を見出そうとした論考として田仲一成氏『中国祭祀演劇研究』（一九八二・八）がある。

本作品がただちにそうした作品であつたと考えることは性急であるにせよ、既にふれた程嬰ら三人を祀る廟で演じられた原「趙氏孤兒」劇<sup>107</sup>でもいうべきものが存在したとすれば、上文で明らかにしてきた本劇の特徴、とりわけ明代のテキストが意図的に切り捨てた、或いは切り捨てざるを得なかつた元刊本の特徴となる部分が、そうした過程の中で形成されたと考えることもまた可能であろう。それこそが、舞台の上で演じられ、観られるものとしての本来の特徴であつたのである。

なお、本劇と同じ題材に拠つた南戲「趙氏孤兒記」劇が現存することは既にふれたが、それについては、他日改めて論じることとしたい。

## 注

(1) これら文物資料の発見については、拙稿「紹介——山西中南部の戯曲文物とその研究」（『中国文学報』第三十七冊、一九八六・十）を参照されたい。なお本稿は、筆者が一九八二年度京都大学博士後期課程一年次研究報告として京都大学に提出したものをこのたび書き改めたものである。

(2) 田仲一成氏「明清・華北地方劇の研究」（『北海道大学文学部紀要』×31-1、一九六八）は、地方志の中に散在する資料をたんねんに集め、その展開過程を明らかにしようとしたものである。

(3) 鍾嗣成「錄鬼簿」巻上には、「大都の人、李壽卿、鄭廷玉、時を同じくす」というのみで、多くの雜劇作者と同じく伝記は不明である。また周知の通り「元刊古今雜劇三十種」本では、すべての作品にわたり作者の名が記されていない。

(4) R. P. de Prémare, *«L'Orphelin de la Maison de Tchao»* (一七三五年刊) のほか、数種の翻訳があり、これが Voltaire を刺激して、その翻案 *«L'Orphelin de la Chine»* (一七五五年刊) を生んだことは、諸書にその言及がある。

(5) 『史記』趙世家に見えるものを、本稿に関連する部分について原文のまま引いておく。

靈公立十四年、益驕。趙盾驟諫、靈公弗聽。及食熊蹯、膾不熟、殺宰人、持其尸出、趙盾見之。靈公由此懼、欲殺盾。盾素仁愛人、嘗所食桑下餓人反扞救盾、盾以得亡。未出境、而趙穿弑靈公而立襄公弟黑臀、是爲成公。趙盾復反、任國政。君子譏盾、「爲正卿、亡不出境、反不討賊。」故太史書曰、「趙盾弑其君。」晉景公時而趙盾卒、諡爲宣孟、子朔嗣。……晉景公之三年、大夫屠岸賈欲誅趙氏。……屠岸賈者、始有寵於靈公、及至於景公而賈爲司寇、將作難、乃治靈公之賊以致趙盾、徧告諸將曰、「盾雖不知、猶爲賊首、以臣弑君、子孫在朝、何以懲羣、請誅之。」韓厥曰、「靈公遇賊、趙盾在外、吾先君以爲無罪、故不誅。今諸君將誅其後、是非先君之意而今妄誅。妄誅謂之亂、臣有大事而君不聞、是無君也。」屠岸賈不聽。韓厥告趙朔趣亡。朔不肯、曰、「子必不絕趙祀、朔死不恨。」韓厥許諾、稱疾不出。賈不請而擅與諸將攻趙氏於下宮、殺趙朔、趙同、趙括、趙嬰齊、皆滅其族。趙朔妻成公姊、有遺腹、走公宮匿。趙朔客曰公孫杵臼、杵臼謂朔友人程嬰曰、「胡不死。」程嬰曰、「朔之婦有遺腹、若幸而男、吾奉之。即女也、吾徐死耳。」居無何、而朔婦免身、生男。屠岸賈聞之、索於宮中。夫人置兒絝中、祝曰、「趙宗滅乎、若號、即不滅、若無聲。」及索、兒竟無

聲。已脱、程嬰謂公孫杵臼曰、「今一索不得、後必且復索之、奈何。」公孫杵臼曰、「立孤與死孰難。」程嬰曰、「死易、立孤難耳。」公孫杵臼曰、「趙氏先君遇子厚、子強爲其難者、吾爲其易者、請先死。」乃二人謀取他人嬰兒負之、衣以文葆、匿山中。程嬰出、謬謂諸將軍曰、「嬰不肖、不能立趙孤。誰能與我千金、吾告趙氏孤處。」諸將皆喜、許之、發師隨程嬰攻公孫杵臼。杵臼謬曰、「小人哉程嬰。昔下宮之難不能死、與我謀匿趙氏孤兒、今又賣我。縱不能立、而忍賣之乎。」抱兒呼曰、「天乎天乎、趙氏孤兒何罪。請活之、獨殺杵臼可也。」諸將不許、遂殺杵臼與孤兒。諸將不許、遂殺杵臼與孤兒。諸將以爲趙氏孤兒良已死。皆喜。然趙氏真孤乃反在、程嬰卒與俱匿山中。居十五年、晉景公疾、卜之、大業之後不達者爲祟。景公問韓厥、厥知趙孤在、乃曰、「大業之後在晉絕祀者、其趙氏乎。……」景公問、「趙尚有後子孫乎。」韓厥具以實告、於是景公乃與韓厥謀立趙孤兒、召而匿之宮中。諸將不得已、乃曰、「昔下宮之難、屠岸賈爲之、矯以君命、并命群臣。非然、孰敢作難。微君之疾、群臣固且請立趙後。今君有命、群臣之願也。」於是召趙武、程嬰徧拜諸將、遂反與程嬰、趙武攻屠岸賈、滅其族。復與趙武田邑如故。

さらにこの後、孤兒つまり趙武が成人したのを見とどけて、程嬰が趙朔と公孫杵臼に報ずる為にと自殺するという話を載せている。

- (6) 時代ははるかに降るが、清道光『太平稟志』巻五等では、すこしのちの神宗元豐年間に程嬰を成信侯、公孫杵臼を忠智侯に封じて廟に祀り、その詔勅を刻した碑を立て、さらに徽宗の崇寧三年になつて韓厥を義成侯に封じ、三人合せて、祚德三侯廟と名付けて祀つたという。また、清乾隆『平陽府志』巻三十一・古蹟には太平稟、つまりここでいう絳に屠岸賈の城、公孫杵臼の墓といった遺跡があることを記載し、一方、『山西通志』にははるかに離れた忻州にも彼ら三人の墓とされるものがあつたことを述べ、また清光緒『忻州志』巻七古蹟にも、屠岸賈の城、あるいは程嬰・公孫杵臼が孤兒と程嬰の子をすりかえたという「賢兒溝」や程嬰が孤兒を匿したという「藏孤橋」といったものが見える。こうした「古蹟」が散在することは、この物語がこの土地でいかに好まれたかを示す証左ともなう。

趙氏孤兒劇小論——元雜劇に於ける「悲劇」の一断面—— (赤松紀彦)

- (7) このことについて、既に張庚・郭漢城主編『中国戲曲通史(上)』(中国戲劇出版社、一九八〇・四)が、南渡ののち杭州にも祚德廟が作られたという『夢梁錄』巻十四忠節祠にみえる記載をはじめ、いくつかの資料を引きつつ、三人が南宋でいかに顕彰されたかを述べている。なお該書はその第二章「北雜劇作家と作品概説」において、その第五節として「趙氏孤兒」劇をとりあげ、七ページにわたつてこの作品に分析を加えている。元刊本と臧本の差違に注目しつつ、その特徴を明らかにしようとする点で、本稿の論旨とも重なる部分があるが、本劇の基調が元朝に反抗し趙宋を復興しようとする思想を宣揚することにあるとする点には、にわかに賛同し難い。

- (8) 青木正児氏『元人雜劇序説』(一九三七)第四章「初期の本色派」に、「元刊本は曲詞のみで科白は一切省略されて居るので詳細は知り得られぬが、第四折に科白ばかりで復讐の一場を簡単に演じたものかと思はれる。『元曲選』本に第五折を増出したのは全く蛇足である。」という。

- (9) 原本は「雀踏枝」に作る。改めた。元刊本の校訂本としては、鄭騫『校訂元刊三十種』(台北世界書局、一九六二)と徐沁君『新校元刊雜劇三十種』(北京中華書局、一九八〇)があり、さらに我が国に於けるものとして、目下「拜月亭」・「任風子」とこの「趙氏孤兒」の三種を収めた、高橋繁樹氏他『新校訂元刊雜劇三十種(一)』(佐賀大学教養部紀要第十九巻、一九八七・三)がある。本稿では一々記さないが、この三種を参考とした。

- (10) 「元刊雜劇三十種序説」(『未名』三号、一九八三・一)。

- (11) 臧本では、「枉了我報主的忠良一旦休、只他那蠢國的姦臣權在手、他平白地使機謀、將俺雲陽市斬首、兀的是出氣力的下場頭、(我が主君に報おうとする忠良の心は一朝にしておしまい。国に虫食うかの姦臣が国權を手に収め、いわれなく謀りごとにもいせ、……)に作る。臧本がどう作られているかについては、以下いちいち記さない。

- (12) 「亢金」、「玉座」と訳したのは意訳。亢は二十八宿の一つで金にあたり、帝王の象徴である竜が配される。第四折粉蝶兒にも、「乞緊亢金上鑾輿」とある。
- (13) 拙稿「汗衫劇について——元刊本・明抄本と明刊本——」(『中国文学報』第三

十四冊、一九八二・十)を参考されたい。

- (14) 『宋元戲曲考』第十二章「元劇之文章」(一九一二)。「明以後、傳奇無非喜劇、而元則有悲劇在其中。就其存者言之、如漢宮秋、梧桐雨、西蜀夢、火燒介子推、張千替殺妻等、初無所謂先離後合、始困終亨之事也。其最有悲劇之性質者、則如閔漢卿之竇娥冤、紀君祥之趙氏孤兒。劇中雖有惡人交構其間、而其蹈湯赴火者、仍出於其主人翁之意志。即列之於世界大悲劇中、亦無媿色也」と。ここで言及された「西蜀夢」、「火燒介子推」、「張千替殺妻」の三種は元刊本のみ伝わる。そもそも元刊本が北京図書館の所蔵に帰する以前の所有者は王国維の師とも言うべき羅振玉であったから、王国維のこの評価は当然元刊本の内容を踏まえてのものであろう。

- (15) 楔子の歌唱者趙朔の脚色は、元刊本では不明、臧本では「冲末」とする。しかし第一折以下の正末と同じ俳優が演じたのではないか。

- (16) その第一篇「祭祀演劇の発生」第五章「鎮魂演劇の発生」。全体の序に、「本篇では、古代から宋元時代に至る村落祭祀記録を分析することによって、中国における祭祀儀礼、特に鎮魂儀礼からの悲劇的要素、悲劇様式の成立過程を追跡した。」と。

- (17) 南宋と対峙していた金そして元の時代、後者の版図に属していたこの地の廟が、果たして存在していたのか否か、という点で無論仮定の域を出ない。